

42164

教科書文庫

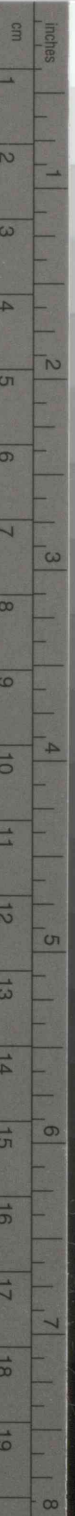
4
810
42-1922
200030
1952

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



375.9  
Y019  
資料室

訂五女子國語讀本

卷三



3759  
Y019

資料室  
日八廿月一年一十正大  
濟定檢省部立  
書科教科語國校學女等高

吉田彌平  
篠田利英  
小島政吉  
岡田正美  
共編

# 訂五 女子國語讀本 卷三

東京 金港堂書籍株式會社

(In. Simako)  
(Sunamoto)

折く年を  
惜みし

## 訂五 女子國語讀本 卷三

廣  
大  
目次

一	千里の春	大和田建樹	一
二	渡舟	坪内雄藏	九
三	田舎より	藤岡作太郎	三
四	老僧の接木	室鳩巢	五
五	人の一生		七
六	潮の岬	杉村廣太郎	八
七	難破船	相馬御風	三

目次



八	夕雲雀	三〇
九	紅蘭女史その一	三輪眞佐子 三
一〇	紅蘭女史その二	三輪眞佐子 三
一一	杜鵑	藤代禎輔 三
一二	桶峽	中邨秋香 四
一三	珊瑚礁	若林欽 四
一四	南洋	五
一五	漁村	武島羽衣 五
一六	わが故郷	徳富健次郎 六
一七	夏	田山花袋 七

一八	雑草	幸田露伴 七
一九	水の都	高安月郊 七
二〇	蜀山人の盆燈籠	饗庭篁村 八
〇二一	禮者	太田蜀山 七
二二	大石良雄と忠僕八介	藤岡作太郎 九
二三	飛驒の山中より	遅塚麗水 九
〇二四	青島	九
二五	科學の進歩と戦争	一九
二六	漢字の音	二七
二七	國民性	芳賀矢一 二三

二八	蟲の音……………	沼波瓊音 一三
二九	松平信綱の幼時……………	新井白石 一三
三〇	美濃の隱家……………	岸上質軒 一三



五訂 女子國語讀本卷三

國文學者、歌人。  
明治四十三年歿す。

一 千里の春

大和田建樹

春晴千里、山青く、水緑なり。此の間に一線を引行くものは何ぞ。一列の汽車、今や、東京より東海道を下りゆくなり。海に面して窓に倚る客、鉛筆と紙とを手にして寫し出だすは、歌か、詩か、抑、畫か。

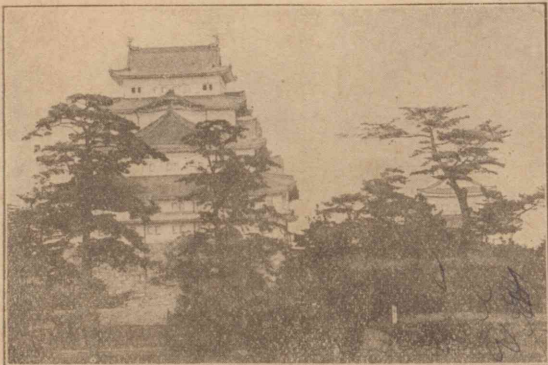
七砲臺の邊、波穩にして、高く低く群れ飛ぶ鷗、落花の風に翻るに似たり。帆を半ば張りて出で行く舟あ

品川の藝場。

り。櫓を操りて横ぎる舟あり。房總二州の山は霞に消えて、探れども見えず。松青き處、彩り添ふるに桃の紅なるを以てす。自然は此の美を送りて旅客を慰め、詩人は彼の美を詠じて春に謝せんとす。藤澤の野、山北の谷、人毎に唯美しと叫ぶ。

富士山は水彩畫の如くにして、窓の右に立ち、又左に見はる。三保の松原煙りわたりて、夢の如く淡し。磯に碎けて折れかへる波、波路の末に浮立つ雲、何もかも造化の妙技に漏れん。近き舟は行けども、遠き帆は動かんともせず。杳として認められたるは、伊豆なるべし。

豆なるべし。



名古屋城

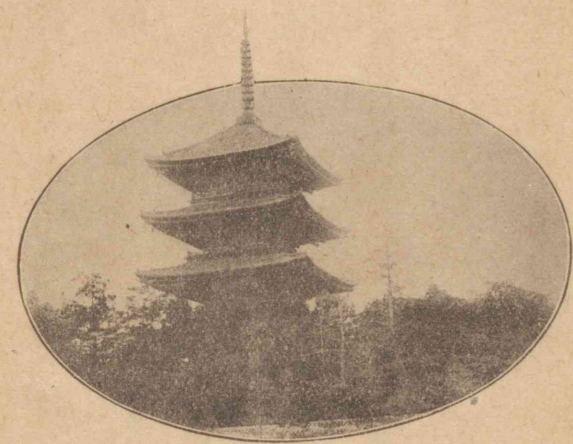
平原十里、麥は緑に、菜の花は黄なり。熱田の社を左に見て、春風に吹かれゆけば、名古屋の城はまがはぬ影を見せ初めたり。田夫は金の鯨を指して妻と語り、行商は旅宿の可否を評して、我が好む方へと人を勧む。

彦根去り、草津來り、煙は早くも瀬田川に横たはりて、京都も近くなりぬ。朝日將軍の遺跡今は何れの處

\*木曾義仲。

\*鳩の海とも云ふ。琵琶湖の異名。

ぞ、問へども答へず。霞に疊まる、遠近の山、或は淡く、或は濃く、<sup>\*</sup>鳩の浦風波に眠りて、粟津の松風獨り昔に似たり。



東寺の塔

東寺の塔は睦まじく我を迎へて立ち、鴨川の水はなつかしく我を迎へて歌ふ。最愛の母に逢ひ、懐かしき友と語るに似たるは、我が京都に着ける時のいつもの心地なりけり。

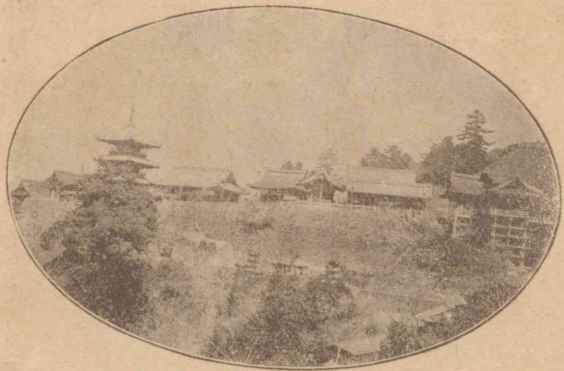
山紫に水明らかなる處、唯夢の如く、現の如く、三條を渡り四條を渡ること、日に幾たびぞ。躑躅を柴に折添へて戴き連れたる大原女も、いつしか我が友とされるが如し。如意嶽より吹來る春風は軽く我が袖を拂ひ去る。

類なき晴天は日々老若男女を誘ひて、西へ東へと群れ行かしむ。さしつゞきたる日傘は橋の欄干とともに水に影を落せり。花に誘はれて佛に詣で、佛に導かれて花を見る客、今日も清水觀音堂の前を滿せり。舞臺の上より見下す人、舞臺の下より咲誇る花、

四條派の畫。門人松村吳春此の派を開く。

仁和寺をいふ。

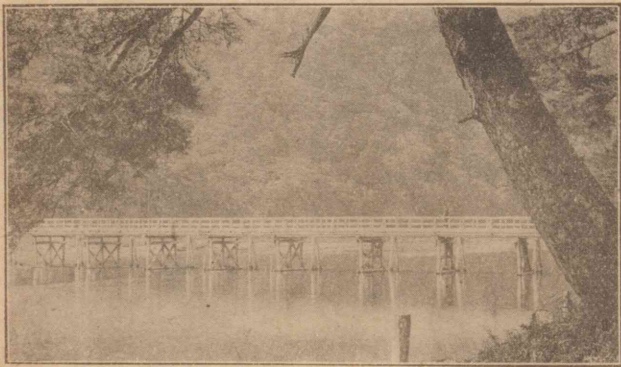
恰も一幅の四條畫を展べたるが如きに、媯は此の間に立ちて、蕨餅召せなど呼ぶ。暫し休みて、眺め渡せば、淺黄に、藍に、霞み渡れる八幡



清水觀音堂

山崎のあたりも面白きに、東寺の塔を松の木の上に墨書きにせる筆こそは殊に巧なれ。西山の花みる人は多く先づ御室を指す。松青く、樓門赤く、茶煙絶えぐぐに揚りて、花極めて白し。塔は霞を漏れて松風の外に聳え、鐘樓は昔を

説きて香雲の中に包まる。誦經の聲遠く響きて、鶯



嵐山

の聲長へに高き梢にあり。重なる岩根を踏みしめて生ひ立つ松、其の間を點綴して咲き誇れる花、嵐山の春こそは今閑なれ。小舟に乗りて漕ぎ行く人あり。岸の此方にて眺むる人あり。渡月橋を渡れば嵐山の麓なり。大堰川に沿ひて遡り、坂を登りて大悲閣に至れば、眼下にひろげらる、

京都西陣にて織出す西陣織。友禪といふ者の工夫し出したる染模様の華麗なる

一幅の圖、柳、櫻をこきまぜて、恰も西陣を織出せるが如く、又、友禪を染めなせるが如し。途に、太秦を過ぎて、廣隆寺を訪ふ。夕陽靜かに鐘樓の瓦を染めて、春ものさびし。茶店あれども、客來らず。少女は落花を風に任せて眠り、兒童は仁王門に紙礫を打ちつけて去る。

暮色は東山を籠め、叡山を縈りて、やうく、鴨川に襲ひ來れり。清水の塔も半ば隠れぬ。大文字の跡も姿を隠しぬ。紫に、紅に、藍に、墨に、見るく、彩られ行く山影、淡く、濃く、青く、黒く、消されゆく人影、詩中のも

のならぬは無し。天地たゞ平和、四望たゞ寂寞。顧みれば、西山も無く、北山も有らず。(雪月花)

二 渡舟

坪内雄藏

しだれ柳の影ひたす、  
村と村とのさかひ川、  
波があや織る土手際に、  
今日も人待つ渡守。

雨の日、風の夜、朝夕に、

\* 道邊と號す。文學者。早稲田大學名譽教授。



渡呼びつゝ、來る人は  
旅あきうどや、村の爺、  
町の女房、役場員、  
竿かたげたる魚釣や、  
獵犬つれたる若紳士、  
西國巡禮、角兵衛獅子、  
郵便配達、小荷駄馬。  
なりも言葉もいろくが、  
暫し乗合ふ舟の中、  
知るも知らぬも知りあうて、

かたる間もなく向岸、  
思ひくにおりたちて、  
西へ東へわかれゆく、  
往くを送れば、また來る。  
相手は日々にかはれども、  
かはらぬ流、同じぬし。  
岸の青柳、水の月、  
波間の鳥もなじみにて、  
春秋いくつかさぬらん。  
〔國語讀本〕

\*文學博士。  
東京帝國大學  
文學部教授。  
明治四十三年  
四月三十日  
卒。

三 田舎より

藤岡作太郎

拜啓。その後、御起居如何に候か。昨秋、一家擧つてこの地に移り候ひてより、往來する友もなく、日一里の道を學校に通ふのみにて候ひしが、この頃の春の景色に、おのづから心も浮き立ち候へば、學校の休日毎に、弟妹と共に田野の間を歩き廻り、例の水彩畫をも試み候。最近のもの一枚、小包郵便にて御送り申上候間、御笑覽下され度候。畫面の内、小川の傍に高き松の聳えたる、その下の

藁屋が私共の住居に候。土橋の上に立ちたるは弟と妹とに候。川の堤の様々の色うるはしきは、若草の中に、菫、蒲公英、蓮華草などの咲亂れたるにて候。その中には土筆も多く生じ、妹などは時々前垂に一杯にして歸り候。堤のあなたの緑の色濃きは麥畠に候が、まだ穂は出でず候。黄色なるは菜の花の咲満ちたるにて、舞ひ居る蝶を招き居り候。この頃は、野にも畑にも一面に、火鉢の上に火氣の昇るが如く、ちらくちらくと動くもの見え候。この陽

炎のみは、晝には書け申さず候。又、雲雀も空高く揚り居り候へども、これも亦晝中には入らず、残念に候。青天に一點の塵と見るほど小さく、聲ばかり大きなるが、やがてふつと啼止みて、逆落しに麥畠のうちに落ち候。山陰の藪には、今も鶯囀り居り候。この邊にては、夏の頃までも、かやうに啼續くるよしに候。

都の友の消息ゆかしく、上野・日比谷の春色も思ひやられ候。御近況御知らせ下され度候。草々。

(一) 名は直清。漢學者。徳川幕府の儒官。享保十九年歿す。

(二) 東京上野公園の西北。もと多くの寺院に給せられたり。

(三) 徳川家光。

四 老僧の接木

室 鳩 巢

谷中の里に、何がしの院といふ眞言寺あり。我、幼かりし時、その住僧を知りて、屢寺に行きて、木の實拾ひなどして遊びしが、住僧傍の人に向ひて、前住のことを語りしを聞きしことあり。寛永の頃とかや、將軍家谷中あたり御鷹狩の節、御徒步にて、此處彼處御過ぎがてに御覽まし、くけるが、この寺へも、圖らず立寄られしに、折節、その時の住僧はや八旬に及びて、庭に出で自ら接木して居けるが、御伴の人々はおくれて、御側には二人三人扈從せるのみなりしを、さる貴

き御方とは思ひもよらねば、そのまゝ背き居たりしを、「坊主何事するぞ」と仰せられしかば、老僧心に怪しと思ひて、いとほしたなく、接木するよ」と御答申し、かば御笑ありて、老僧が年にて、今接木したりとも、その樹の大きくなるまでの命も知り難し。それに左様に心を盡すこと不用なるぞ」と上意ありしかば、老僧御身は誰人なれば、かく心なき事をいひ給ふぞ。よく思ひて見たまへ。今この樹どもつぎておきをば、後住の代に至りて、いづれも大きく生ひ立つべし。然らば、林も茂り寺も幽ならんと、我は寺の爲を思ひ

てすることなり。あながちに人一代に限るべきことかは、といひしを聞かれて、老僧が申すこそ、實にも理なれ」と感ぜられけり。その程に、御供の人々おひおひ來りつゝ、御紋の物ども多くつどひしかば、老僧それに心得て、大いに恐れて奥へ遁げ入りしを、召出されて物など賜ひきとぞ。(駿臺雜話)

五 人の一生

\*人の一生は重荷を負うて遠き道を行くがごとし、急ぐべからず。不自由を常と思へば、不足なし。心に

\*東照宮御遺訓として世に傳へたるものなり。

望起らば、困窮したるときを思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基、怒は敵と思へ。勝つことばかり知つて、負くることを知らざれば、害其の身に至る。己れを責めて、人を責むるなかれ。及ばざるは過ぎたるよりまされり。

六 潮の岬

杉村廣太郎

とかくして、潮の岬の端へ出た。なだらかな高低のついた一面の芝生が見る目遙かに打續いて、其の間に薊・蒲公英が咲いてゐる。背を屈めたやうな磯馴

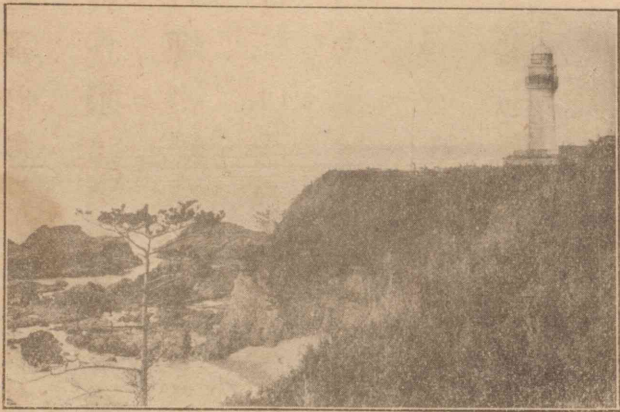
紀伊の南端の岬  
楚人冠と號す。  
東京朝日新聞記者。

松がぼつりくと處々に立つて居て、それに繋がれた牛の姿が如何にも春らしい。村の少女子が、此の芝生で鬼事でもするのか、陽氣を笑ひ聲が遠くで聞える。右の方には、燈臺の白い壁が巍然として中空に聳え、左には、無線電信局と海軍の望樓とが、さながら崖から落ちかゝるやうな處に立つてゐる。崖の下はと見ると、幾千年の波に洗はれて地骨あらはになつた巖が幾重となく列んで、之に太平洋の大波がどろくと、寄せては返し、寄せては返ししてゐる。余等は今や日本の本土の最南端の一角に立つてゐる。

るのだ。打開けた太平洋の海面、雲煙森渺として、其の果は何處としも覺えぬ。地圖を按ずるに、此處から正南は丁度蘭領印度のニューギニヤを隔て、濠太利亞の大陸に相對し、東は遙かに太平洋の千波萬波を越えて北亞米利加カリフォルニヤ州のロスアンゼルスまで間を遮るものもない。日本の南端の一角といふと、如何にも世の中から棄てられた處のやりに聞えるが、其の實、此の一角が即ち日本と世界との接觸する處なのだから、面白い。

まづ、此の岬角に立つてゐる白色不動の燈臺は、世界

の船舶に其の針路を示してゐる。此處の無線電信局は、日々夜々に世界と相語つてゐる。ことに、海軍の望樓に至つては、夜となく、日となく、苟も此の下に船の影さへ見えると、内外いづれの國の船たるを問はず、必ず其の名を問ひ、其の行先を尋ね、さては、其の用向を聞いて傳ふべき處に傳へる。かく世界的に出來た處に育つた



\*明治四十二年。

潮の岬の人々として、其の中から濠洲や米國に出稼する者の多く出て來たのも無理はない。荒海を見慣れた眼には、對岸を隣國とも心得てゐるだらう。潮の岬の民は小さいながらも世界の民だなど考へながら、ふと自分の事に氣がつくと、今日は四月の廿二日、去年は愈、紐育の見物を終へて、明日大西洋に乘出さうとした日、一昨年は丁度今頃巴里から倫敦へ向ふ途中、海峡を過ぎて、ケント州の櫻桃・杏梨の今を盛と咲亂れた中を走つてゐたのである。折しも、望樓で頻りに信號旗を揚げる。それとばかり

り、友を促して急いで見に行けば、望樓長は芝生に立って、ある望遠鏡の下に坐つて、信號旗を上げよ、下げよ、と忙しげに指揮してゐる。隣の無線電信局では、ぱちくくくとけた、ましい音を立て、電信をかけてゐる。今まで静まり返つてゐた此の日本の最南端の一角は、俄かに色めき立つて見えた。沖には通報艦の「淀」が行く。(へちまのかは)

\*名は昌治。文學者。

七 難破船

\*相馬 御風

先日の暴風浪の時に起つた事件である。場所はあ

\*大正六年。

の有名な親不知附近。

六月十二日の夕方から起つ

た大荒は翌十三日に續いたが、

十三日の朝九時頃になつて、親

不知東海岸へ乗上げた五艘の

漁船があつた。何れも越中宮

崎村の漁船であつたが、幸ひ乗

手は皆生命に別状は無かつた。

併し、彼等は皆暫くは起つこと

が出来ない程に疲れもし、餓ゑ

もして居た。處が彼等が救助されてから間もなく、



越後親不知の嶮

又しても一艘の小形漁船がその濱へ漂流して來た。今度のは小さいのと、乗手が僅かに二人ほか無いのと、しかも其の二人が極度の疲労に達してゐるらしいのとの爲に、とても彼等自身の力で、岸近くまで乗上げることが出来ない様に見えた。それで附近の村民は、大舉して其の哀れな漂流船一艘を助けようと集り騒いだけれども、荒狂ふ大浪に氣を吞まれて、たゞ徒に騒ぎ廻るだけで、誰一人波をくゞつて救助に向はうとするものがなかつた。しかも漂流しつゝある二人の漁師の命は、刻々に危



險に瀕するばかりであつた。折も折、突如として彼等の間へ割込んで来て、その役目を自分に任せてくれと申し出た二人の男があつた。見ると、それは數刻前に救ひ上げられた越中の漁師であつた。その二人は年はまだ若く、身體も頗る丈夫さうに見えたのであるが、何を云ふにも、つい今の今まで、綿の様に疲れて寝て居た人たちである。人々は一時は喜びはしたものの、しかしひどく危まないでは居られなかつた。二人は云つた、私達は、どうせ死ぬものと覺悟して居た命を、かうして助けて貰つたのだから、死

んだつもりで飛込んで見よう。漁師は相見互だ。この場合に黙つて見て居ては濟まぬ。そして二人は咄嗟の間に救助船に乗込んで、すさまじい怒濤の中に分入つた。しかし、不幸にも、その瞬間、かの漂流船は重なり來つた大浪に吞まれて、見る間に姿を没してしまひ、折角奮ひ起つた二人の苦しい努力も、遂に水泡に歸してしまつた。二人の努力は、かくして遂にその甲斐が無かつた。しかし、彼等の示した美しい同情と勇氣とは、人々の胸に深い感銘を與へた。これこそ眞の同情だ、これ

こそ眞の犠牲的行爲だ。そして其の勇氣と力とは何と云ふ美しさであらう。今にも死にさうにまで疲れ切つて居た體のどこから、それほどの勇氣と力とが出たのだらう。不思議な勇氣だ、不思議な力だ。多數の疲れぬい丈夫な人達の中から、遂に涌起らないうで、綿の様に疲れて居た人達の中から、突如として涌起つた其の勇氣と力とは何といふ崇嚴な表現だらう。

私は此の話を聞いた時に、幾度か感歎の聲を繰返さないでは居られなかつた。そして更にさうした感

激がやゝ永く續いた後で、私は、その二人の漁師だとして、恐らく平常は一向つまらない人達なのであらう。しかも機會に遭遇すれば突如として彼等の内部から、さうした崇嚴な同情と勇氣と力とが涌上つて來る。人間そのもの、奥底に潜んで居る尊さがあらはれるのである。何れにしても驚くべき事實だ、崇嚴な事實だ。と思つた。

私自身としては、彼等の如き單純に生きる人達の生活の上に、時あつて表現される善良なもの、美しいもの、感化を出来るだけ私自身の魂に受入れ得るこ

とをより多く希求してゐる。他人の救よりも寧ろ  
自分自らの救を求めるのである。(樹かけ)

八 夕雲雀

三條西季知

芝生には何時おち來らん夕雲雀

なほ空たかく聲のきこゆる。

木下幸文

鶯の來て啼く聲に起されし

あさいの夢は惜しけくもなし。

京都の公卿。

京都の歌人。  
文政四年歿す。

筑前の歌人。  
明治元年歿す。

歌人。  
命婦。

紀伊の歌人。  
安政五年歿す。

京都の歌人。  
享和元年歿す。

大隈言道

歸り來てねたるわらはの袂より

こぼれ出でたる花すみれかな。

小池道子

主人にはいとまごひして、更にまた

垣根のはなをかへりみるかな。

加納諸平

夜をかけて昨日も見つる花ながら、

けふ又更に珍しきかな。

小澤蘆庵

江戸の歌人。

ときぬとさなへとりぐいでして、

田中のさとは夏ぞさびしき。

土岐筑波子

中垣のあらはなりしも、夏くれば、

はひもてかくす夕顔のはな。

女流教育家、  
三輪日女學校長

九 紅蘭女史その一

三輪田眞佐子

美濃國安八郡曾  
根村の人。勤  
王家の詩人、勤

紅蘭女史は齡十七にして詩人梁川星巖に嫁せり。  
居ること未だ數句を越えざるに、星巖女史を顧みて  
いふ、吾暫し近國を漫遊せん。その間に之を讀み給

へ。とて、三體詩を與へて、飄然として家を出でたり。

女史はしばしが程と思ひしに、待てどもく歸り來

ず。秋の雁はふたゝび歸り來れども、何の玉章をも

齎さず。春の花は三たび咲けども、訪ひくる人の影

もなし。されば、離別せよ。など勸むるものもありし

かど、女史は拒みて肯はず、日々に機によりて布を織

りつゝ、三體詩を誦しけり。

三年を経たる秋、星巖家に歸りて、かの詩は少しは讀

みたりや。と問ふに、女史、一句をも誤らで誦しけり。

この後、女史は益書を讀み詩歌を學びて怠らざりけ

れば、夫と共に四方を歴遊して、名聲大いに揚れり。女史は才學に秀でたるのみならず、裁縫のわざをはじめとして家政の道にも精しかりき。書畫は頗る巧なれども、多くは「鍼線餘事」と刻める印を用ひたり。これ文人墨客を以て自ら居らざるしるしなるべし。良人は勤王家なりければ、國事に關する書類はいと多かりけるが、女史は豫め幕府の意を知りて、良人に謀りて之を烟となしぬ。その後、果して吏來りてその家を搜索せしかど、何の證跡をも得ること能はざりき。あはれかゝる婦人こそまことに能く良人を

輔佐すとはいふべけれ。

善ク歌フ者虞公  
アリ聲ヲ發シ  
テ梁上ノ塵ヲ動  
カス。  
桑青、節ヲ撫シ  
テ悲歌ス。聲、  
林木ヲ振ハシ、  
響、行雲ヲ過ス。

女史嘗て良人より黄金數箇を得て、永く囊中に藏めて、こよなき寶となしぬ。あはれに優しき情なりけり。女史は、又、琴に熟達し、詩歌に和して弾じけるが、其の妙なること、梁の塵をとばし、空行く雲を過むといふ程なりければ、自ら良人を慰め、一家の中さながら春風の薫れるが如くなりき。凡そ、學問に長ぜる女子は濃かなる情に乏しく、和順の徳を缺けるもの多き習なるに、實に女史の如きは類稀なる婦人といふべし。

二〇 紅蘭女史 その二

三輪田眞佐子

安政五年九月二日、梁川星巖翁、尊王の大志を抱きながら、病のために世を去りけり。この時、幕府にては井伊大老事を執り、外國と條約を結び、大に志士を捕へぬ。幕吏はかねて星巖を指したりしかば、やがて其の妻紅蘭を捕へたり。捕吏の來りしとき、女史は少しも騒がず、從容として家人を顧みて、心して留守せよ。といひて、さながら隣家に行くが如く、泰然として出でゆきけり。

\*井伊直弼。

幕吏女史を糺問して、尊攘論者の事情を探り知らんとつとめしかど、女史は答へていはく、吾が夫は輕々しく人に機密を洩すが如きものならねば、われは聊かも知れることなし。よしありとも、夫の秘密を告ぐるは妻の道にあらじ。とて、何事をも言はざりければ、吏もせんかたなくて止みぬ。

女史は今や獄中の人となれり。獄吏も流石に物のあはれをば知りたりけん、數羽の鳩を飼ひて、その無聊を慰むる事を許しぬ。女史更に紙墨を得ん事を望みけれども、許されず、唯筆と板とを與へられけれ

ば、晝は淡水もて板面に書畫を描き、夜は詩を作り、歌を詠じて、思を遣りぬ。かくて、うき月日を獄中に送ること半年近くに及びしが、高き操は益、高く心は露ばかりも汚れざりけり。  
明月雲に蔽はるとも、いつかは雲晴れて光照りそふ時をからん。女史、翌年二月十六日に至りて、赦されて再び青天白日の身となれり。

二 杜鵑

藤代 禎輔

ほと、ぎす自由自在に聞く里は、

獨逸文學者。文學博士。京都帝國大學教授。頭光といふ狂歌師の作。

酒屋へ三里、豆腐屋へ二里。

といふ歌は、子供の時分に聞覚えたもので、杜鵑は中聽く機會の少ないものだと思つて居た。「てつべんかけたか」といふ啼聲だといふことも、早くから人に聞いては居たが、本物の聲を聞いたことは一度もない、どうかして、聞いて見たいものだ、豫てあこがれて居た。東京へ出てから親戚の別莊が巢鴨\*に在つて、其處では、折々杜鵑が聞けると云ふので、三月ばかり、其の別莊に住まはせて貰つたこともあるが、たうとう望が遂げられなかつた。其の後、萬葉集を讀

\*東京の西北郊。

んで見ると、晝は終日夜は徹宵、杜鵑が來啼きとよもすと云ふ歌の文句が、頻に目に附く。昔はそんなに杜鵑が多かつたものかしら、歌人の大袈裟な表現ではあるまいかと、半信半疑であつた。

京都へ來てからは、こゝかしこに杜鵑の名所があるやうに聞いた。嵯峨の小倉山邊では、晝でも杜鵑が啼いて居ると云ふ話だ。けれども、未だ一度も行く機會が無かつた。ところが、四月半ばに、叡山へ上つた時、雲母越の途中から道連れになつた叡山通の話に、初夏の新緑の頃、既望後の月夜に、杜鵑を聽きなが

ら上るのが、興の深いものだと聞いて、宿願成就の時節到來と、心中歡呼の聲を揚ぐるを禁じ得なかつた。そこで、大正二年五月二十三日、陰曆十八日の夜、雲母越を四明が嶽に上ることゝ一決した。頂上に達する頃、夜の白々と明ける景色がいふにいはず美しいと聞いて居るから、午前一時半頃結束して、同行二人、犬を連れて出發した。月影は穩かな灰白い光で、一帯の山野を覆ひ、東山のふつくりした寢姿、叡山のどつしりした雄姿が、はつきりと眼に映じる。

一乗寺村を通ると、人家は盡く寐靜まつて、折々犬の



遠吼を聞くのみであるが、かゝる田舎の茅屋にまで引いてある電燈の火影は、戸の隙間から外へ洩れて居る。愈、雲母阪に掛ると、左右から覆ひ被さつた木下闇に、鼻を撮まれても分らないほどである。何遍か此の阪を往き來したことがある。ペスも、今夜ばかりは心細いと見えて、悲しさうな聲を出して、頻に足許に纏はる。晝間でも随分骨の折れる阪を、眞の闇に登るのであるから、折々石に躓いたり、雨落ちの窪みへ滑り込んだりしながら進むと、遙か上の方で何やら聞えた様な氣がする。杜鵑ぢやないかと、立止

つて耳を立てる。後が續かないので、見當が附かぬ。或は一町も先の方に進んでゐるペスの啼き聲かとも思はれた。

音羽瀧の音の聞える平坦な隘路に出ると、再び月光に浴する身となつた。一町と行かぬうちに、またも阪道に差掛る。夜陰の有難さには、露は深い、餘程涼しいので、喘ぎ／＼登つても、汗は左程に出ぬ。二十分も経つたかと思ふ頃、愈、杜鵑の聲が聞えだした。これが臍の緒切つて始めて聞いたのであるから、一所懸命に耳を澄す。成る程、てつぺんかけたか」と聞

える。眞に佳い聲だ。前に記した叡山通が、遠州の山奥で見たと云つて、杜鵑が一羽、樹の枝に留つて居ると、下の枝に鶯が二羽留つてゐて、さも感心した様に、杜鵑の鳴き聲を傾聴して居た。云は、杜鵑は鶯の先生である。といふ様な話を聞かせた。あの聲をら、鶯の先生といはれても恥かしくないと思つた。

(文藝と人生)

愛知縣愛知郡有松村  
松村  
國文學者、歌人。  
宮内省御歌所寄  
人。  
明治四十三年歿す。

二三 桶峽

天地に轟くはた、神、

中 邨 秋 香

尾張國愛知郡沓掛村  
尾張國知多郡大高村  
尾張國愛知郡笠寺村  
尾張國西春日井郡清洲町

篠を束ねて降る雨を  
神の祐と唄つたひ、  
銜を包み、草摺まきて、  
攻入る必死の三千騎。

沓懸・大高笠寺の

野にも山にも満ちくたる  
四萬五千の駿河の軍勢。  
明日は清洲を攻め落し、  
決河破竹のいきほひにて、

尾張の國を定めんと、  
心驕りの酒うたげ。

松の嵐は琴のしらべ、  
鳴神のおとは鼓のひびき、  
よに心地よきうたげや」と、  
佩きつる太刀の緒打解けて、  
歌ひつ舞ひつ、もろともに  
興たけなはなる折しもあれ、

四面に起る鬨の聲。

すは敵ぞといはせもあへず、

雨よりしげき寄手の槍先、

嵐をしまく敵の太刀風。

天たちまち覆り、地みるく裂け、

きらめく稻妻光のひまに、

二千餘人の玉の緒は

草葉の露と消えにけり。

あゝ、定めなき人の世や。

あゝ頼まれぬ人の身や。

さもいかめしく轟きし

名は、ときの間のはたゝがみ。

夢の名残の松風も

昔のあとやたづぬらん、

五月雨寒き桶峽。(新體詩歌集)

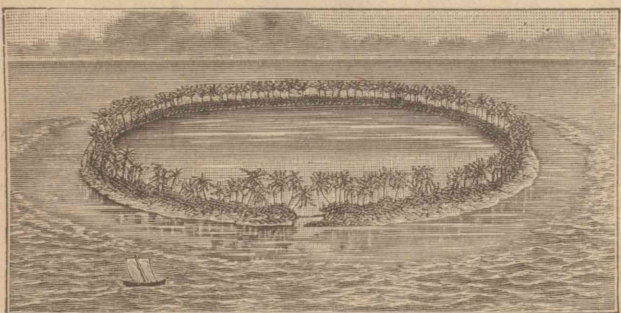
海軍中佐。

一三 珊瑚礁

若林 欽

予は始めて珊瑚礁を見たときに、其の奇妙な美しさに驚いた。南洋の廣い海上に於て、各島の周圍には

海岸より一二海里づつ隔て、環礁がある。波が之



珊瑚礁

に當つて礁上十尺以上十五尺の水が常に進り立ち、礁内は波が平か、で、さながら防波堤を繞らした様である。水の綺麗なため、船上より海の底を精しく視ることが出来るが、海の底の全面は悉く珊瑚礁を敷きつめて、各種異様の形と色とを現し、大小多くの魚族が其の間に泳いで居る。其の光景の美しさは實に言

語に絶してゐる。珊瑚島は日光を受けることが強烈であるが、風が絶えず吹き、珊瑚の聳えた礁の上には波が常に白い珠を降らし、日光が之に映つて時をらぬ虹を生じて、見る目が非常に愉快である。礁内に入ると、水面は鏡の如く、水の色は澄んで、さながら水晶を透して海底を見る様である。浅く見えるが、其の實は大に深いのである。

何處の植物園にも、此處の海底に見る如き奇態な、美しい、鮮やかなるものはあるまい。珊瑚礁は或は灌木の如く、或は麥の穂の如く、或は蕈の如く、或は鹿角

の如く、或は甘藍の如く、無數の珊瑚蟲を其の上に乗せ、綠紫・黃褐色又は眞白な美しい房を現出して居る。而して、其の間に大小各種の貝殻が散布して居る。殊に珍しいのは大蛤で、最も大なるものは重さ百斤に達するものがある。此の大蛤の半ば開いた口中に多くの魚が這入つたり出たりして、平然と泳ぎまはつて居る。又、美しい鯛を始め、色々の魚が深い淵より跳り出でて、首尾相接し、愉快に、活潑に運動して、其の美麗を誇る有様は、實に人目を眩するばかりである。

斯くて、永く海の底を瞰いて見て居ると、何人も造化の、あらゆる生物に幸福を授け給へる仁愛の心の、深く且大なるを知ると同時に、各自自己の境遇に満足しなればならない事を悟るであらう。(面白い科學の話)

一四 南洋

常夏の南洋にはどんな興趣があるか。まづお笑草に私の腰折を。

鱻を追ひ、海豚に逐はれ、我が船の

今日も亦見つスマトラの山。

\*本文の作者大庭  
柯公。

歐洲行の船が新嘉坡を出て、スマトラの北岸が大陸に迫つて自然の海峡をなして居る長い間を二日に互つて進航する時の暑さはまた格別である。柴棍のことを亞細亞の小巴里とか、爪哇のことを世界の樂園とかいふのは、西洋人のお世辭でなければ、誇張である。あの暑さを考へると、護謨が幾ら儲からうと、果物が如何に旨からうと、南洋の常住は餘り望ましいものではない。只旅行者として或時期を過すには、恐らく南洋ほど多大の興趣を感じる處は他になからう。花や葉の飽くまで鮮麗な色彩、驟雨の爽

快な氣分、綠陰の涌くが如き涼味などは、南洋旅行者の獨り享受し得べき賜である。

夕立の眞の趣は赤道近き熱帶地方でなければ、とても味ふことが出来ぬ。日本なら、行水や沛然として夕立す位で済ましてゐられるが、南洋の驟雨と來ては眞の底抜け雨で、雨聲極めて猛烈、下界の何物をも降飛はして了ふといふほどの豪雨である。支那では哀猿といふ熟字が詩文に用ひてあるが、これは南方支那から來たもので、驟雨に驚いて啼叫ぶ猿を謂つたものであらう。南洋の竹は矗立數丈、鬱蒼と茂

つて、所謂篁を成して居るが、一旦驟雨が襲つて來ると、親猿も子猿も幾十匹となく、きいくと叫び續けて、竹林を登つたり下つたりする。五分もたぬ間に、今迄の盆を覆す程の豪雨がびたりととまる。同時に猛烈な太陽の直射が、雨にぬれた青や紅の色の一層鮮かに見える幅の廣い葉に照りつける。二分とたぬ間に、乾き盡して、路上にも枝にも葉にも、雨の跡が露ほどもものこらない。

南洋植物の景觀には、蘿葛類の壯觀と綠葉の美觀とあるが、これに彼の驟雨の襲來するときが、一番壯快

であると思ふ。赤道附近の航海者が、夕立雲の見え  
 るや否や眞裸で、手にシヤボン一つ持つて甲板へ飛  
 出して、待つ間程なく襲ひ來る急雨に、瀧でも浴びる  
 氣になつて、頭からシヤボンをなすりつけて、手取早  
 く雨浴を済ますのは航海者に取つて無上の樂だ。  
 て、天然の一浴を済まして、悠々と浴衣でも着ようと  
 する。と、眼前に開いて居る瑠璃色の海面を銀の矢  
 のやうに飛んでをる飛魚の愉快げな様。誰でも詩  
 情を起さずには居られぬ。

新嘉坡の植物園や、爪哇シヤムのポイテンヅルグの植物園

などは、旅人の爲に確かな樂園である。動物界から  
 いつても、鱧や毒蛇の害は怖るべきではあるが、亦天  
 狗猿の鼻の格好に笑を催すこともある。或種の守  
 宮モミヤが室内や蚊帳の上に奇聲キセウを發して初旅の者に輕  
 い驚を與へることや、南洋蛙として特色のある牛鳴  
 蛙が、牛のやうな太い聲で水田・河邊に鳴いて居るな  
 ども、亦旅中の新興味である。(世界を家としてに據る)

\*名は又次郎。  
 國文學者、詩人。  
 文士。

一五 漁村

武島羽衣

松原こゆる夕風に



たく藻のけぶり靡きつゝ  
 さびしく暮るゝ沖のへの  
 小島がかげもかくれけり。  
 幾とせ浪に馴れけんを、  
 さてしも荒き磯のべに  
 をちを眺めて海人びとの  
 數もあまたにみだれたり。  
 折しも一人おいびとの  
 船まつほどのなぐさめと  
 わらはをみなを打集へ、

身のいにしへを語りけり。  
 あるは風あれ雲まよふ  
 空のみだれに船でして  
 歸るすべなき海原に  
 日數をへてしわびしさを  
 あるは浪路の花もさく  
 春のうらゝに棹さして  
 綱手引く手もたゆきまで  
 幸多かりしうれしさを。  
 またある時は闇の夜に

潮瀬をすぎし大ぶねの

岩にukだけてたちまちに

沈みてうせしかなしさを。

またある時は月清み

漕ぎでて見れば、久方の

天にもものぼるこゝちして

ひとよ遊びしたのしさを。

わらはゝ萬づ忘れつゝ、

翁オキキの顔をまもりたり。

をみなもかうべうちたれて

言葉もあらず聞きほれぬ。

かくあるほどにをちかたの

けむりの沖をかきわけて

海人のよび聲かはしつゝ、

こぎくる船の二つ三つ。

やがて渚つらにちかづけば

集あへる海人はみながらに

かたへのくゞつひきさげて

そなたざまへと走りゆく。

綱繰りよするものもあり、

網乾しわたすものもあり、  
 かたへに高き真砂地に  
 船おしあぐるものもあり。  
 鰭イサのひろもの籠に入れて  
 數いとさはに持ちゆくは  
 このわたりなる里なかの  
 市のちまたにはこぶらん。  
 土にまみれし五つ三つ  
 わづかに乞ひて歸る子は  
 世に住みわぶるたらちねの

夕げのためといそぐらし。  
 しばしがほどに人々の  
 こなたかなたに行きわかれ、  
 さへづりあひしこわねさへ  
 あとなきまでになりゆけば、  
 おのが時ぞと夕ぐれは  
 つれなく告ぐる浦浪の  
 音を残して、あめつちを  
 ひとつ色にぞつゝみける。(霓裳微吟)

\*著述家。  
蘆花と號す。

一六 わが故郷

徳富健次郎

わが故郷は九州のほゞ真中で、海に遠い地方、幅一里長さ三里といふ、もつさうの底見たやうな谷である。どちらを向いても、雑木山がぐるりと屏風を立てまはし、その上から春は青くなり冬は白くなる遠山がちよいく、顔を出して居る。最も高いのは東に一つ孤立して居る高鞍山で、だれが天邊に乗捨てたのか、さながら鞍を置いたやう。雨が降る前には、必ずこの山に雲がかゝる。この山が見えだすと、どんなに降つて居ても、やがて霽れる。

雲がかゝるのも、日が射すのも、まづ此の山が第一で、いはゞ、わが故郷の氣象臺だ。四方の山から混々と涌出る清水は集つて、村人のいはゆる大川・小川の二流となり、十分に谷を潤して居る。谷は一面の田。その田を無理におしのけて、こゝに村が一撮み、かしこに家が二三十。北の隅にあるのが、まづこの谷の都で、町といへば町だが、戸数は千にも足りない。取出していふ程でも無いが、今に忘れ難いのは、水の清さと稲の美しさである。たしか東京に積出して、鮭米にするさうな。その稲葉のつや／＼と青んで、

のびくくと立揃つた所は、都人士に見せたい。  
殊に見せたいのは、蛙の聲を踏分けて、一村總出の田  
植時、さをとめの白手拭がひらりくと風に靡いて、  
畦から畦に田植歌の流れる頃の賑やかさである。  
それから、炎天の田の草取は、わきで見てもつらい。  
すると、夕方、暑い、堪らぬ」といふ下から、ごろ／＼鳴り  
出す。俄かに大氣が冷える。見ると、黒雲がもう高  
鞍山を七分どほり呑んで居る。それがインキの散  
るやうに、ずうと満天に浸みひろがつて来る。稻妻  
がひかり。夥しい雷鳴が二つ三つ。つめたい風が

さつと吹いて来ると、やがて、大粒の雨がほつり。耳  
を掩うた太郎作がまだ半町と逃げ延びぬ中に、光る、  
鳴る、降る、吹く、世の終りかと思ふ程の荒れやう。と  
思へば、忽ちずうと明るくなる。笠おつ取つて、出て  
見る頃は、夕立は最早隣村へ逃げのびて、隣村はさな  
がら簾越しになつて居る。大空を眞二つに割つて、  
東の方はまだ眞暗、雷様がごろ／＼太鼓を敲いて居  
るが、西の方はあか／＼と夕日がさして、高鞍山のとて  
つべんと思ふあたりから谷へかけて、すばらしい虹  
が立つて居る。あゝ、涼しい。見よ、先程まで萎えし

をれて居つた稻が、たつた一瞬の間に、眼も覺める程青々となつて、一二寸も伸びたやうに、どこを見ても、さわく、とさゞめいては露を搖りこぼして居る。濁り泡だつ田の水はどくく、溢れて、小鮒や鱒がやたらに畔路にはねて居る。

蟲送も濟んで、初秋の風がそよくと稻葉に音づれる頃は、夜は露より明けて、朝日に匂ふ稻花の美しさ。二百十日・二百二十日の厄日も事なく過ぎて、青疊敷いた谷間がいつしか金色に照つて、こゝにもさわさわ、そこにもさくく、收穫のさかりになれば、だれを

訪ねても家には居ない、皆田に出て居る。時雨が降出すと、夜晩くまで粃ずりの音が聞えて、高鞍山に雪が見える頃は、つい先月まで田にあつた稻が最早奇麗な米俵になつて、庫や納屋に積まれて、農夫は新酒に舌鼓うつて豊年を祝ふのである。

夫から水。あゝ、こんな水が縦横に市中を流れて居たら、東京もどんなによからう。わが故郷では殆ど井戸の用なしといつてよい位。四方の山から絶えず涌出る清水は縦横に小さな流をなして、鮎走る二つの川に落合ふ。どこに行つても、潺々淙々の音が

聞える。夏の月夜などに、じつと聞いて居ると、實に  
好い。京都は水がよいといふが、自分は京都よりも  
よいと思ふ。馬が飲む道傍の小溝の水も、女が洗濯  
をする家の前の流も、乃至水車が攪混ぜる田川の水  
も、實に氷とつめたく、玉と澄んで居る。今でも、夏に  
なると、自分は一入故郷をしのぶのである。(思出の記)

一七 夏

田山 花袋

夏は曇りたるより照りたるぞよき。空碧に、日の光  
きら、かにかゝやきて、金をも銷さん如き日、靜かに

\*  
名は録彌。  
著述家。

机にむかひて書を讀むも興なきにあらず。黄塵の  
堆き裏におのが業にいそしむも、亦おのづから樂み  
あり。芭蕉の廣葉に夕風の渡るを聞きつゝ、靜かに  
語り合ふなどいかに嬉しからん。  
日の暮るゝを待ちて、檐の岐阜提燈に火を點じ、縁に  
花塵敷かせて、團扇使ひつゝ、一家團樂の物語に耽る。  
眞に得難き夏の賜なるべし。闇の夜にてもよし。  
空に閃く星の影を數へて、北斗の所在などを指さし  
合はん。月あらば更によし。梧桐寒山竹の間より、  
研ぎすましたる鏡の如き光を仰がんには、晝の暑さ

も忘れ果つべし。

幼き頃家に居て、垣根の杉などを手折り來て、古摺鉢すりばちに灰少し入れて、蚊をいぶしたることありき。蚊遣トヤ火は趣深きものなり。そことも知らぬ森の中に、ゆくりなく立ちのぼる蚊遣の烟こゝにも人住めりやとなつかし。

夏の旅ことにをかし。日盛の二三時間を松並木の涼しき休茶屋にいこひつゝ、朝と夕とに歩みても、日永き頃なれば、冬の日よりも却て長き里程を歩み得べし。田舎道の露店などに、清き水涌きいでて、素麵

を冷したる、食指おのづから動く。

登山も夏の面白きものゝ一つなり。輕装して都を出で、遙かに連山の蒼翠を望む、心既に蒼翠の上にある。登山の快は絶巔たつみに登り得たる時にあり。されど絶巔に至るまでの努力も亦一快なり。あえぎあえぎ登るに、森盡き、草原盡き、高山植物盡き、遂に岩石磊々たる處に達す。一望まことに天下を小にする思あるべし。登るべき山は、富士山を始め、木曾の御岳、駒が岳、日本アルプスの稱ある信濃の白馬岳、槍が岳、北陸の白山、立山など。なほ到る處に多し。



海もよし、山もよし。山ならば老樹深く、谿流清く、嵐氣肌を襲ふ處、海ならば絶海のほとり、怒濤天を衝く邊殊によし。

七月中旬ごろより晴れたる空は、十五日乃至二十日續くべし。この照りによりて、稻も其の莖をのばす。この照りとこの暑さとや、緩む時、即ち土用のあけ頃より、低氣壓襲ひ來りて、夏の雨頻なり。

夏の雨は驟雨性を帶ぶ。忽ち晴れて美しき空顯れ、日の光射すかと思へば、白き黒き雲忽ち襲ひ來て、雨沛然として至る。物干竿の衣を取入るゝ間も無し。

その雨量比較的によく、地によりては河水汎濫し、鐵道不通になること往々にしてあり。

此の雨霽れて秋氣到る。殘暑なほ凌ぎ難けれど、樹間叢裡既に秋の聲あり。梧桐芭蕉は殊に此の聲を聞くに佳し。

雲の色と態と稍趣を變ふ。奇峯漸く少なく、白き雲多し。夜稻妻の遠く光るも此の頃なり。一閃毎に、闇の中の雲の姿を明かに辨じ得る、言ひ知らず面白し。田の面には涼しき風吹きわたる。(花袋小品)

\*名は成行。  
文學者。  
博士。

一八 雜草

\*幸田露伴

雜草といふものこそおそろしきものなれ。之を蹂  
みにじり、之を荊薙ぎ、之を拔棄て、之を燒拂ひても、終  
にほろびうせたる例を聞かず。必ず年々の春夏を  
我が世顔に生ひしげりて、あはよくば、人の思を寄す  
る園の花をも逐ひのけ、民の命と頼む稻麥をも虐げ  
て、おのれのみ心のまゝに蔓り榮えんとす。されば  
園守・田夫少しく之を除き去ることを怠れば、忽ち其  
の咎を得て、花は色無く、穀はみのらざるに至る。さ  
れば、世に若し雜草といふものなからば、能く勤むる

\*名は三郎。  
文學者。

者も、惰る者も、一度種子を播き、苗を植ゑたる以上は  
皆同じ報を得べきに、これありて勤むるものは佳報  
を得、惰るものは惡果を得。雜草は人間の怠惰を警  
むる造化の鞭にやあらんとおそろし。(潮待ち草)

一九 水の都

\*高安月郊

大阪は水の都である。町幅が狭いだけ川が大道で  
ある。淀川は大通りである。横堀は小路である。  
町を通るより川を通る方が大阪の特色が味はれる。  
夏は殊に夕日が暖簾に消える頃、手近の堀へいつて

小舟に乗ると、風はまだ兩側の軒の釣葱にも動かず。竹簾を漏れる燈火、縁側の岐阜提燈の影がゆるい流に流れぬ上を流れて、小橋の數を數へながら、やうやう大川へ出ると風は俄に舟の灯を吹く。舷を扇で叩いて謠曲・淨瑠璃うなりながら、舟生簀へつけて料理をあつらへ、舟へ運び入れて更に溯る。我等の子供の頃などは難波橋と天神橋との間に中洲があつた。それへつけて上つて暫く休むと、寄つて來るのは果物の舟、鮨の舟、花火の舟、落語の舟、此方の舟では飲食して彼方の舟の藝を見物する。一つ濟むと互

に離れる。知人の舟とはからず逢ふ。舟を寄せて舟に語る。盃を交して風に別れる。水はいよ／＼赤くなる。舟には絃歌の聲が高くなる。俗を喜ぶ者は中を巡つて夜を忘れる。雅を求める者は更に溯つて天神橋の下を通る。天満橋の下を通る。網島の横を通る。櫻の宮あたりまで上ると、花火も聞えぬ。物賣の舟も追ひつかぬ。絃歌も誘はぬ。始めて舷に寄るのは月である。水の都の涼しさはこゝである。暑い町の解脱はこゝである。しかし近年川涼みは振はぬ様になつた。

大川の水まで暑くなつたのか。月まで赤くなつたのか。舟より、電車があたりの海山へ涼みにまで走らせる爲か。抑、解脱といふ事を求めもせぬ様になつた爲か。(畿内見物)

二〇 蜀山人の盆燈籠

饗庭篁村

文化元年の頃とかや、小石川陸尺町に庄助と呼ぶ男住めり。日傭又はかつぎ商ひなどして世を渡りしが、七月十二日の朝、小石川壽經寺の門前に立つ草市へ行燈燈籠と云ふものを持行きて賣りけるに、如何

太田罩、南畝と號す。載號は四方赤良。和漢學者、特に狂歌を以て著る。文政六年歿す。名は與三郎。小説家。東京朝日新聞記者。傳通院の前、今の大門町。

にしけるにや、買ふ者更になく、賣れしはわづか十ばかり、残りしが多ければ、力を落し、情なき顔してかつ

ぎ歸りけり。



太田南畝

途中にて日頃出入る太田南畝翁の許に立寄りて、臺所の者に、儲々困る事かな、この盆は如何にして過し

申さん。今朝の市にこれほど燈籠賣れ残り候。この分にては明朝神樂阪の市に持行き候とも、また今朝の如くなるべし。もとより手細工にせし事には

\*牛込にあり。

あれど、聊か資本もかゝりたり。この分にては水も吞まれ申さず」とかこちけり。

南畝翁は座敷にて之を聞かれ、手に持つ盃を下に置きて、「かの聲は庄助にあらずや」と問はるゝにぞ、傍の者、斯様々々にて、「又かの泣男がかこち申し候」と言ひければ、翁は臺所に出られ、「偕も氣の毒なる事よ、願の下が乾きては、難儀ならん。わが言ふ如くせば、少しは賣るゝ事もあるべし」といはれければ、それは有難き事に候。いかに致すべき」と、翁の顔をいかにも有難げに仰ぎ見て問ふに、翁は白紙五帖ばかり取出し、

「これにてその燈籠を張替へよ。何か書きてやらん」といはる。悦びて立歸りしが、忽ちに百あまり張替へて持てきたれば、翁は例の草書にて狂歌やら發句やらなぐりつけて渡されけり。

庄助は頭を搔きつゝ、一禮を述べて、荷ひ歸る途々、蓮の花を紅入りにて書いてさへ賣れぬに、いかに先生なればとて、かゝる冗書の反古張にては買人はあるまじ。さりながらあれ程に仰せられし事なれば、先づ明朝、神樂阪の市に持行き、賣れ残りたらば、その事を申して歎きつき、二百疋も借りて外商ひの元手に

せん。」と、工面顔にて足も重く二三町歩む向ふより、侍一人來かゝりしが、供の者に言付けて、その燈籠は賣物か。」と問ふ。 偕はと悦び、「いかにも賣物に候。 やうやう傳を求めて先生に書いて貰ひまうしたるにて、心あても有りて拵へ候なれども、これほどは入り申さず候。 お望ならば差上げ申さん。」といふに、「價はいか程ぞ。」と問ふ。 幾許と云ひてよき事やら、庄助はたと行詰りしが、思ひ切つて五十文と云ふ。 「その直にて二つくれよ。」と、百文渡して買行きたり。 又あとより通りかゝりし人、「それ賣るならば買ひたし。」といふ。

\*  
蜀山人の戲號。

今度は息を一杯に吹きて、六十四文と云ふに、いふがまゝに又買行きたり。 あとより又此方へも二つ、我にも一つと、おのが家に歸るまでに二十ばかりも賣れて、凡そ一貫二百文骨折らずに取り、かくて女房に話せば、「誠に寢惚様は生佛様なり。 有難き事なり。 明日は早くより持出で給へ、私も参りて手傳ひ申さん。 一人にては手も足るまじ。 一つ盗まれても五十と百の損なり。」と、女のいふ。 夫婦は翌朝早起して神樂阪に到り、並ぶる間もなく、「蜀山人の書いたる燈籠とは珍し。」と一人立止りて價

を問ふ。庄助思ひ切つて百文と言へば、さもあるべきぞ。とて買行く。女房、夫の袖を引き、百にても直切らずに買つて行かるゝからは、二百文といふとも賣れ申さん。二百文といひ給へ。と、智慧をつくるに、庄助額に手を加へつゝ、二百は餘り高かるべし、さらば百五十文といふ。夫より百五十文にて六七十を賣り、遂には先見明かなるその妻の言の如く、二百文より一文も引かず。と肩を怒らし、まだ五つ半にもならぬに賣り切れたり。錢二十貫程、金にして三兩ばかりになりし故、夫婦こけつ轉びつ翁の許に到り、亭主

を搔きのけて女房言を出し、有難い。を數千遍のべて、いかにも先生は生佛様なり。と、今度は神あしらひにしつゝ、悦び歸りきとぞ。翁が醉餘の戯、よく枯骨に膏すといふべし。(雀躍)

三 禮者

太田 蜀山

元日

生醉シロイの禮者を見れば大道を

横すぢかひに春は來にけり。

永日

春がすみ立ちくたびれて武藏野の

はら一杯にのばす日のあし。

鶉ウツ

一つとり二つとりてはやいてくふ

鶉ウツなくなる深草のさと。

橋上霜

世の中は我より先に用のある

人のあしあと橋の上の霜。

歳暮

今更になにか惜まん神武より

二千年來くれてゆく年。

雀

雀どのお宿はどこか知らぬども、

ちよつちよとござれさゝの相手に。

三三 大石良雄と忠僕八介 藤岡作太郎

元祿十五年十二月十五日、冴えたる月影も薄らぎ、昨日降りし雪の上より、夜は明けぬ。朝風寒き永代橋を、同勢あまた、火事装束に身を固めて、足並勇ましく西へ渡るは、これぞ、赤穂の浪士四十餘人が今しも本

\*播磨國赤穂郡にあり。

夕ユフされば野邊の秋風身にして鶉ウツなくなり深草の里（藤原俊成）

雞聲茅店ノ月、人跡板橋ノ霜。（唐詩）



\*徳川中期の兵學家・會津の人。江戸に住む。

望を遂げて高輪の泉岳寺に引上ぐるなりける。見驚き、聞驚きて、噂は忽ち江戸中に弘り、諸國に弘りぬ。何處の里も、その評判のみ喧しく、浪士の平生の事、その一族、從僕の事までも多く世に傳はれり。四十餘人を指揮せる大石良雄は、通稱を内藏介といふ。もと、千五百石の祿を食みて、淺野家の國家老なりき。小兵にして、聲低く、詞すくなく、立居振舞も靜かなり。寛文の頃、山鹿素行罪を幕府に獲て、赤穂に預けらる。素行、經學と兵法とを以て天下に名あり。一日、赤穂侯に對ひていはく、日頃の厚遇、謝し奉るに

\*徳川中期の儒者京都の人。

辭なし。聊か御恩に報いんが爲に、心腹を傾けて諸士を教へたり。蒔きたる種は生ゆる時も候ふべし。と。良雄もこれに學び、又、京に出てては伊藤仁齋の門に入れり。仁齋評して、この人、愚なるが如くなれども庸器にあらず。必ず大事に堪へん。といへり。赤穂の封奪はれし時、諸士狼狽してせんすべを知らず。良雄、日頃は重用せられず、才ありとも見えざりしが、この時に至りて、少しも周章てたる色なく、事務を處理すること流るゝが如し。諸士始めてその器量に心服して、進退を一任し、その指揮に従ひて働く

こと手足の如くなりき。

赤穂の城を明渡して後は、諸士思ひくゝに離散せり。

\*山城國宇治郡にあり。京都の東南二里。

良雄も亦國を去つて、洛東なる山科\*に移らんとす。

嘗て召使ひし老僕八介といふもの、暇乞にとて來り、わが君今出で立ちたまはゞ、御目にかゝるもこれや限なるべき。われ、かく老朽ちて、御供に立つことのかなはぬこそ残念なれ。せめては、形見の一品にても賜はりたし。といふ。良雄、頭を撫でて、今度の騒動にて、われも途方にくれぬ。重ねての仕官も面倒なれば、都近き田舎の百姓となりて、やすらかに一生を

送らんと思ふなり。長々實義に奉公してくれたる禮に、何なりとも與へんと思へども、今の身の上なれば心に任せず。せめては、これだけにても收めくれよ。とて、十何兩かの金を取出して與へたり。

八介その包を取つて投げ、けがらはし。老いぼれたれども、八介金がほしさに參るべきか。日頃の御心も腐り候か、みだれ候か。金が大事ならば御存分に御貯あれ。思へば、代々高恩の御城主は恨を吞んで御最期あり。赤穂一面、野も山も空しく人手に渡るを見ては、われら如き下藪すら、胸も涌きかへるに、三

百人の侍揃ひも揃りて、腰拔侍にて候ことの悔しさよ。いつの爲とて御城主は侍を養ひ給ひしぞ。赤穂の武士に一人も魂あるものなきか。くち惜しや。と罵りて、涙をはらくと流せり。

良雄は俯きて、物をも言はず。や、久しうして、われ過てり。汝の諫言、永く忘るまじきぞ。とて、やがて筆を執つて、主従二人の姿を畫き、これを見よ、八介。これは、わが若かりし頃、江戸にて、汝を供につれて歩きし様を寫せるなり。昔を思ひ出し、これを形見に取らず。とて與ふれば、八介も、やうく、憤を收め、御筆の

迹こそ賤が伏家の寶なれ。いくばくもなき世に、朝夕君と仰ぎてがしづき奉るべし。とおし戴きて歸れりとぞ。その後、元祿十五年の冬まで、八介はながらへて、復讐の噂を傳へ聞きしか、いかに。(新國語讀本)

\*名は金太郎。文章家。

二三 飛驒の山中より

遅塚麗水

毒蛇の群の、行旅の人を悩ますといふ龍が峰を突貫して、今日は炎天の下に十四里を歩き、唯今飛驒の都の高山を距ること三里、三日町の寒驛まで辛くも到着、旅館に投じ申し候。

をかしかりしは、昨夜の畑佐の宿にて鍍金の飯を饗せられたる事にて候。そは宿の媪、東京のお客様にとて、多大の好意にて、米の飯を炊きくられたるが、麥一分、稗一分、粟一分の三分飯と申すを椀に盛り、其の上に薄く米の飯を盛り添へたるものにて候。箸をつけ候へば、鍍金忽ち剝落、飯と共に一驚を喫し申し候。此の邊にては、瀕死の病人ならでは米の飯を食ふ事なき由に候。菜は烏賊の鹽漬、臭き味噌汁、干瓢に豆腐の煮ノ。鮎をと命じ候に、主人畏るく、入來りて、鮎はご

ざりますが、お高うござりますと斷る。高くともよし、鹽焼にしてと命ずれば、やがて、大きき八九寸のもの數尾を膳に上せ來り申し候。山中の盛饌之に過ぎたるもの無之候。而も、甚だ廉一尾二三錢ばかりにて御座候ひき。

唯今隣房に宿りたる巡査の話に、此の邊は赤痢の流行地との事に候。今日、途上渴に任せて溪水を掬ひ飲みしことを思へば、寒心に堪へず。明曉は早く高山に到り、かねて見んと思ひしものを見物して、急ぎ神通川に沿ひ、一刻も早く飛

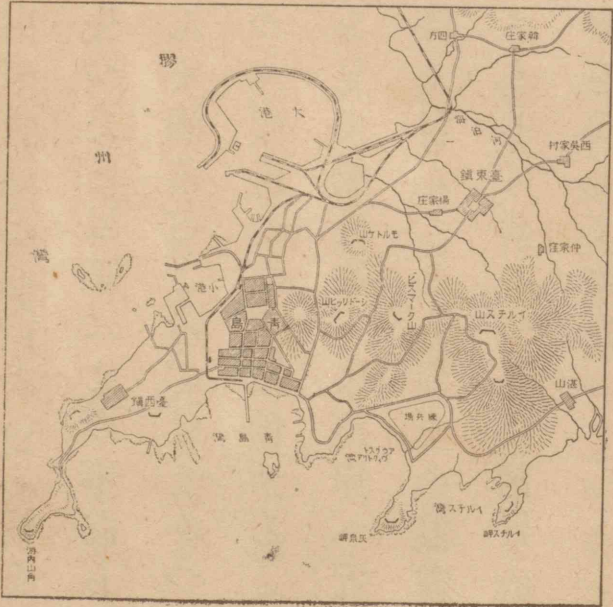
驛を立去り、越中富山に出づる考に御座候。  
 出立の前日、上野へ逃へし乳母車、はや出来いた  
 し候事と存じ候。子供を載せて毎朝公園へ御  
 散歩、然るべくと存じ候。子供の寝冷、火の元共  
 に御用心。草々。(現代名家書簡集)

二四 青島

七月二十一日、未明に起きて甲板に立つて見ると、見  
 渡すかぎり一面の深い濃霧が海原をこめてゐる。  
 波のうねりが小さくなつて、その色は少し溷濁を帶

大正六年に催せ  
 る第一高等學校  
 の支那旅行  
 記事

びてゐる。餘程陸地近くなつたのだ。膠州灣の山



影がもう望めるだらうと思ふ時分に船體はびたりと動搖を止めて、やがて錨を下して了つた。船員に尋ねると、霧が深いために陸地に接近するところが危険で、とても進むことが出来ないのでさうな。やつとの思ひでこ

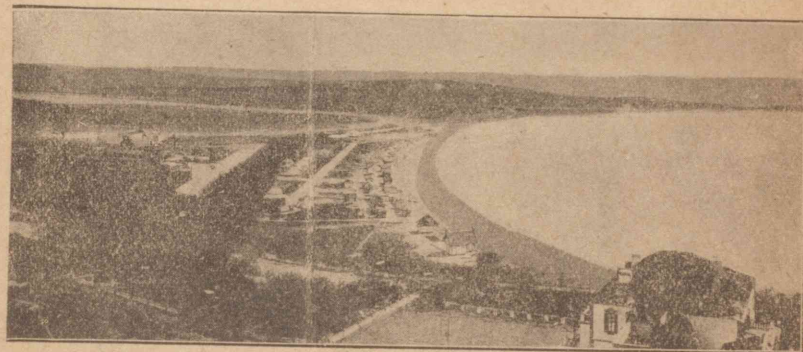
ここまで漕ぎつけて眼と鼻の間の陸地に上ることが出来ないとはいふ情ないことだ。取付く島を失つたとは正にこの事だらうと考へた。否、實は、そんな洒落どころではなかつた。絶えず警笛を鳴しつゝ、濃霧の中を彷徨すること七時間、漸く霧の晴間を見て、船は徐々に海岸へ近づいた。深く包んでゐた海上の濃霧が次第に霽れて行く。さうして、夢のやうな前景の中に、青島の風光が朧な姿を現して來た。

低く、海添ひに並んでゐる。午後の光線を逆に受けた帆船が黒く光りながらエメラルドの海を傾きつつ走つて行く。その上を鷗の群が亂れて飛ぶ。海上から眺めた青島は美しい港である。南歐の瀟洒たる別荘地とでもいふやうな趣のある港だ。埠頭に着いて、先づ眼を驚かしたのは、黒山の様に集つてゐる苦力の群である。あのきたならしい様子をしてじろく、人を見廻してゐる光景は、何とも言へず薄氣味悪い。馬車に乗つて荷物を受取るはずみに苦力の手が自分の手にちよつと觸れた時には、

自分は思はずぞつとした。併し、兎に角、自分の足は大地の上に確りとくつゝいてゐる。もう是からは自由に東亞大陸の土を濶歩することが出来る。美しい町だ。アカシヤやプラタヌの葉隠に、簡素な洋館が軒を並べて櫛比してゐる。一行を乗せた五臺の馬車は坦々たる舗道の上を滑つて、やがて、市民俱樂部の門前に留つた。今夜はこゝに泊る。青島には三日滞在の豫定だ。

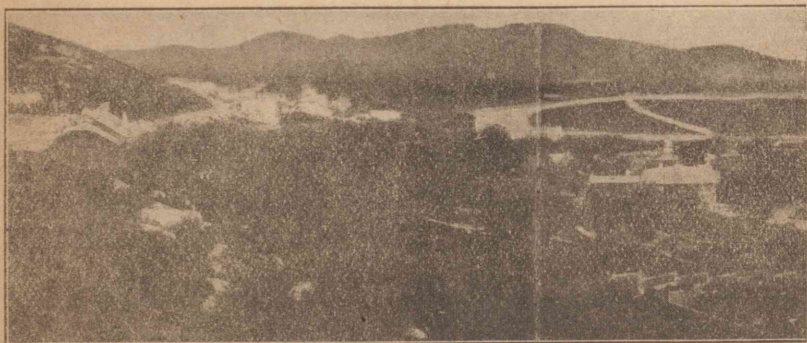
青島に到着したのは、もう夕暮近い時刻だつたので、霧の降つてゐる宵の街を一人であちらこちらとぶらつき廻つた。何とも言へず嬉しい氣持であつた。日本もこんな好い別荘を有つてゐるかと思へば、全く愉快であつた。

青島の家屋は一つとしておなじ形の建築はないさうである。それであるく、な形状をした建物が丘の上や下に散在してゐる光景は何ともいへず快い趣がある。緑葉の植込を透してバルコンの向ふの窓からさゝやかな灯の光が洩れて来る。そこから微かなピアノの音が聽えて來るといふ有様だ。翌日は、附近の砲臺を見て廻つた。砲彈の爲に處々



場兵練スチルイ 礮アリトクイヅ、トスグウア

壊れたり、自爆したりしてゐるの  
 で、もう完全な形體は具へてゐな  
 い。鐵條網なども、貧弱なものが、  
 少しばかり堡壘の麓に残つてゐ  
 るばかりである。戦争から既に  
 三年を経過した今日、戦塵の匂は  
 既に甚だしく薄らいてゐる。併  
 し、イルチス砲臺の山巔に立つて、  
 遠く劍戟の跡を忍びながら、遙か  
 に四周を見廻した時には、消えて



山スチルイ 營兵スチルイ

痕なくなつた敵國雄圖の片影を、  
 流石に悲しまない譯にはゆか  
 かつた。  
 青島には俘虜の遺族がまだ大分  
 残つてゐる。前の民政長官が監  
 禁されてゐるばかりで、その他の  
 者は何等の束縛も受けずにゐる。  
 彼等の多くは婦人と小兒とであ  
 るが、何等悪びれるところもなく、  
 平氣で市中を歩いて居る。平氣



て歩き廻つてゐるとはいへ、彼等の内心は甚だ頼りないことであらう。歐洲の戦雲が何時の日に斂るか測り知り難い今日、無道の惨劇を起したる者の憐れな犠牲は、遠く絶東の小天地にまでも、平和の日を待ちつゝ、その姿を潜めてゐるのである。

次の日は、青島市中の官衙などを見て廻つた。ワルデック總督の官邸は、今代つて大谷軍司令官の官邸になつてゐる。そこは遙かに海を望む小高い丘陵の上にある。内地ではちよつと珍しい宏壯な建築である。

\*  
陸軍大將大谷喜久藏

巖の面に獨逸の國旗たる大鷲の形を彫付けたものが丘の腹に日の光を受けてきら／＼と光つてゐる。今はその鷲の上に、更に大きい「大正三年十月七日」と雄渾な日本文字が彫付けてある。そこから望めば、ぞき眼下に在る軍司令部の臺の上に、大きな日章旗が翩々と風に翻つてゐるのが見える。

青島の郊外へも行つて見た。厚い壁で叩き込んだ農家の低い廂が、小徑の邊にあちこちと並んでゐる。家の入口の壁の上には「天錢如雨臻」などといふ頗る慾張つた文字が紙に書いて貼付けてあつた。島の

隅に土饅頭のやうな墓が出来てゐて、その側に小さな騾馬が晝寐を貪つてゐた。

赤や青のあくどいまでに濃い色彩で飾つた寺の樓門が町はづれの寂しい草原の中に、折からの斜陽を受けて、目まぐるしいばかりに強い光を放つて立つてゐる。寺の前の草原には、牛の群をとめて、年老いた支那の農夫が、白髯を佗しげに撫てまはしてゐた。かういふ悠長な晝題を到る處で見受ける。支那には、不生産的な土地と人間とが、過剰にあると思はれた。

青島は涼しいところだ。日中でも七十五度から八十度の邊を上下してゐる。東から海風が絶えず吹いて来る。こんな涼しいところは内地にもあまり多くはあるまい。(萬朝報に據る)

### 二五 科學の進歩と戰爭

物理學や、化學や、機械學や、數學や、是等の學術は皆生を厚くし、用を利し、世界の文明を進め、人類の幸福を増すべき研究なりと思ひしに、料らざりき、今や人を殺し、國を亡ぼし、物資を蕩盡し、人道を破壊する方便

とならんとは。

天文年中種子島時堯始めて葡萄牙船より鐵砲を得て、之を薩摩の國主島津義久に贈りし時、義久感悅斜ならず、これ日本兵革の根を斷つ器なり。といへり。幾ばくもなく鐵砲は織田・豊臣・徳川の諸將に利用せられ、内國は久しく太平を成すに至りしが、本源なる西洋に在りては研究日に進み、戰爭益巧みになれり。明治開國に方り、我が國も各國と駒を並べて馳するに至り、武器の研究を怠らず。こゝにおいて村田銃出で、山内砲出で、下瀬火藥出で、何年式の銃宮原式汽

罐・無線電信等續々と改良應用せられ、遂に日露戰役の大捷を致せり。此の役の慘害を見て、世界の戰爭はこゝに已まんと一般に思ひしも空頼めにて、各國は此の實驗により益、研究を深くし、下級艦・超下級艦などいふ大艦も、此の時以後の大艦主義に基づけりとかや。

大正三年より

世界大戰の起るに至り、名高き英・佛・獨の學者・軍人たち、こゝを先途と頭腦を絞りて此の研究に注ぎ、其の進歩の速かなること目も及ばぬほどなり。大戰の始めに最も人の目を驚かしたるは獨逸の四十二珊

砲にして、砲身の長さ五米、砲弾は三十斤即ち約七里に達する者なりしが、大戰の第五年大正七年には、砲身三十五米の怪砲アヤシムを以て約三十里外より巴里を砲撃するに至れり。又装甲自動車原名タンクは自動車に装甲し、敵火の下を突進して發砲するものにして、英國の新工夫に出でたり。

戰爭に毒物を應用するは古來卑怯ヒナカクシとする所にして、青島の戰に獨軍が水道に毒を流したるは、猶世間の非難を免れざりき。幾ばくもなく獨軍は歐洲戰場に於て毒瓦斯發射をなし、其の勢力猖獗ウラカクシを極めけれ

ば、各國も已むを得ず之を研究應用するに至れり。毒瓦斯は初め鹽素瓦斯にして、之を吸入すれば激烈の肺炎を發するものなりしが、漸次に青酸・亞砒酸ヒの如き猛毒を用ひ、或は落涙瓦斯とて甚だしく眼を刺戟し、落涙して物を視るを得ざらしむるものを案出せり。

加之、空中には飛行船・飛行機あり、海中には潜水艦ありて、各、其の威力を振へり。是等の機器は大戰前には殆ど實用に適するに至らざりしが、開戰後熱心に研究練磨せし結果として、驚くべき急速の發達をな

せり。飛行機は佛國に於て最も進歩し、特に偵察用として偉大なる功を奏せり。獨逸は飛行船を以て屢、敵國の都市に爆彈を投下し、又潜水艦を以て海中を荒廻れり。大戰の終に近づきては、潜水艦の害大いに減ぜりと雖も、大正七年の前半には毎月撃沈せらるゝ各國の船舶猶三十萬噸に及べり。

獨逸は最も研究應用に長ぜりと雖も、或は飛行船より毒入りのキヤラメルを撒布して敵國の兒童を毒殺し、或は敵國捕虜に結核黴菌を注射するに至りては應用とも惡用とも殆ど言ふべき所を知らざるなり。

り。  
古來籠城の防戰に、壕を掘り、逆茂木を立てしことは、軍書に著し。中世に至り、野戰の陣地にも壕を繞らし、柵を立つること、長篠の役の織田氏の陣地に於けるが如し。現今一般に塹壕と云ふは此の野戰の壕の進歩せるが如き者にして、其の中に兵を容れて、對陣し射撃するなり。光線屈折の理により、壕中より眼鏡を以て敵陣の動靜を知る等種々の設備あり。鐵條網は逆茂木の進歩せるが如き者にして、杭又は天然の樹木に鐵線を縱横に張渡して敵の馳突を妨

ぐるなり。間、其の鐵線に強力の電氣を通じて、進入の敵を電撃することあり。

塹壕については一つの話あり。此の度の大戦より前には、各國の兵士は皆散髪を長く刈りて左右に分けたりしが、愈、開戦するに至りて、獨逸は日露戦役の當時勇敢敏活なりし日本兵の髪が圓刈なりしを想ひ起し、兵士の髪を圓刈にしてこれを「日本形」と名づけたり。かくて英佛もまた其の簡便なるを知りておなじく日本形を採用し、爾來、頭に塹壕ある者は弱兵として笑はるゝに至れり。されば最も悠長にし

て贅澤なるべく想像せられし米國兵さへ次第に頭髪の塹壕を廢するやうになれりといふ。

たゞに頭髮のみならず、願はくは地上の塹壕を一掃して、速かに平和・幸福の世界たらしめよ。人を殺し、國を亡ぼし、物資を蕩盡し、人道を破壊するもの、豈科學の罪ならんや、豈科學の罪ならんや。

### 二六 漢字の音

漢字の我が國に入りし時代は詳ならざれども、支那との交通は前漢の頃より開けたれば、その文字も當

時傳來せしなるべし。然れども、未だ廣く學習する  
には至らざりしものゝ如し。その後、新羅・百濟等と  
の往來頻繁となりしより、漢字も亦かの地方より傳  
來し、應神帝の時には、百濟の博士來りて、皇子に書を  
授くることゝなりし程なれば、學習の道も當時漸く  
開け、流行も漸く廣がりしことゝ見えたり。されば、  
我が國にて、學者の始めて學習せし漢字音は百濟音  
なり。百濟音は、蓋し、支那南方の音の傳りて多少變  
化したるものなるべし。

又、我が國と支那との交通は、晋宋以後に至りて、次第  
に盛になりしかば、我が國人は支那南方に行はれし  
漢字音を讀習ひて、之を傳へたり。されば、漢字傳來  
の初に於て、我が國人の學びたる漢字音は、百濟音と  
支那音との兩様なりしが、兩者とも大概相似たるも  
のにて、均しく支那南方即ち所謂吳の地方の音なり  
しかば、等しく之を吳音と云へり、

推古帝以後、隋・唐と交際を開くに及びて、遣唐使・留學  
生、率ね其の都長安に赴きて、その音を傳へたり。之  
を漢音と云ふ。長安は漢土の本部なるを以て此の  
名あるなり。

吳音漢音は、字ごとに必ず異なるには非ざれども、同じからざるものも頗る多し。遣唐使・留學生の勢力を得るに従つて、漢音を獎勵すること盛になり、特に音博士といふを置きて、専ら彼の國本部の原音を學ぶことを獎勵したり。然れども、吳音は早く我が國に傳來し、久しく國人の口耳に慣れたれば、儒書は大概漢音を以て讀むことゝなりたれども、佛書は多く吳音を以て讀み、その他は漢音・吳音を雜へて讀むことゝなりたり。されば、後世に至りても、普通の言葉には、吳音を用ふること極めて多し。

金 <small>コン</small>	剛 <small>コウ</small>	人 <small>ニン</small>	本 <small>ホン</small>	強 <small>ガウ</small>	情 <small>セイ</small>	名 <small>メイ</small>	聞 <small>ブン</small>	木 <small>モク</small>	灌 <small>クワン</small>	耀 <small>ヤウ</small>
錢 <small>セン</small>	剛 <small>コウ</small>	物 <small>モノ</small>	物 <small>モノ</small>	勉 <small>メン</small>	情 <small>セイ</small>	譽 <small>ヨ</small>	聞 <small>ブン</small>	灌 <small>クワン</small>	耀 <small>ヤウ</small>	耀 <small>ヤウ</small>
物 <small>モノ</small>	穀 <small>コク</small>	家 <small>ケ</small>	來 <small>ライ</small>	去 <small>コ</small>	過 <small>カ</small>	武 <small>ブ</small>	士 <small>シ</small>	會 <small>エ</small>	釋 <small>シヤク</small>	合 <small>カフ</small>
價 <small>ケン</small>	價 <small>ケン</small>	事 <small>ジ</small>	來 <small>ライ</small>	退 <small>タイ</small>	過 <small>カ</small>	士 <small>シ</small>	者 <small>ジャ</small>	會 <small>エ</small>	釋 <small>シヤク</small>	合 <small>カフ</small>

(右の假名は吳音)  
(左のは漢音なり)

吳音漢音既に行はれたる後に於て、宋より以來、彼我僧侶などの來往せしもの、更に彼の國の音を傳へたるものあり。之を唐音タウインと云ふ。唐音といふは我が國にては支那を唐代以後もなほ唐と稱せしを以てなり。唐音の使用はある少數の文字に止りて、一般に行はれたるには非ず。

行燈アンテン 甲板カウバン 胡亂ワラン 蒲團フツワン 亭テイ 鈴リン

何の事やわのちのちのち



近時支那との交通頻繁となるに従つて、又支那現今の北京音を傳へたり。之を支那音と云ふ。これも支那の地名等に用ふるのみにて、多くは行はれず。

上海 芝罘 太沽 牛莊 哈爾濱

右の百濟音・吳音・漢音・唐音・支那音等を一括して字音と云ふ。但し、普通に字音といふは、主として吳音又は漢音のことなり。(漢字要覽に據る)

二七 國民性

芳賀矢一

我が日本國は、氣候は溫和である、山川は秀麗である、

國文學者。  
東京帝國大學教授。

花紅葉、四季折々の風景は誠にうつくしい。かういふ國土の住民が現生活に執着するのは、當然である。四圍の風光の吾等の前に横たはつてゐるもの、凡て笑つて居る中に、住民がひとり笑はずには居られぬ。現世を愛しこの世の生活を樂しむ國民が、天地山川を愛し、自然にあこがれるのも、當然である。この點に於ては、吾々は天の福德を得て居るといつてよろしい。殊に、日本人が花鳥風月に親しむことは吾人の生活の何れの方面に於ても見られる。上代における衣食住は、多くは我が國土に繁茂して

居た植物界から材料を取つた。木材で家を造り、藤・葛を以てくゞりつけ、楮でしろたへ、麻であらたへを作り、草木の汁でそれを染め、蔓草を取つてたすきとした。日本の女の子の着物の模様のはでやかなことは、西洋人の著書にもいつも歎賞してあるが、日本の秋の野の景色を見れば、それよりもなほ綺麗である。それが、やがて衣服にもうつゝて來るのである。昔のしのぶしのぶ模様のものずりも今の裾模様も、つまりおなじことである。菊や櫻や梅や牡丹を大きく染出した友禪縮緬、襦珍の帯から下駄の鼻緒のさきまで、草木の模

様で飾つてある。色合の名稱も、櫻色・桃色・山吹色・栗色・葡萄色など澤山ある。中古の女裝束おんなぎの櫻重ね・梅重ね・山吹重ね等も、四季折々の花に因よんだのであつた。

やさしい女流のは、當然ともいはうが、武士の戦争に出立つ甲冑よろいにも小櫻威・卯花威・澤瀉威ササガヒなどいふがある。いかにも優美ではないか。又、旗やさしものに蝶や笹龍膽アサギや澤瀉ササガをつける。皇室の御紋も菊・桐で、徳川家のは葵である。今日の家々の定紋じやうもんにも桔梗・櫻・梅鉢・牡丹・鳶藤・松の類が最も多い。

それから、食物の方面でも、名稱に於て、萩の餅、牡丹餅を始として、菓子屋の目錄を一見すれば、一層その多いことが分る。形も、花木に取るのが多い。菓子には別して多い。汁粉には十二個月の雅名があり、酒にも櫻正宗、菊正宗がある。蓬萊の鳥臺は今も儀式の時に用ひられ、魚類の料理にも植物を用ひ、牡丹餅を贈るには重箱に南天の葉をしく。其の他、庭園の構造でも、室内の裝飾、什器でも、家屋の建築でも、すべて植物を用ひ、自然のまゝの趣味を有して居る。挿花の術、箱庭作り、繪畫など、皆我が國人獨得の伎倆

で特殊の發達をして居る。すべて、花を生けるにも、これを畫くにも、その生きたまゝ、自然のまゝにするのが美しいのである。枝をむしり取つて花ばかり花瓶に挿し込むのは、西洋の風であるが、自然の幹枝をそのまゝに、天地の配合を宜しくあらはすのが、生花でも盆栽でも、日本人の好みである。日本人は眞に自然の友である。よく自然の心を解したものである。

我が國の文學に、自然を吟咏したものが、多いことは、いふまでもない。繪畫が花鳥を以て優つて居るこ

とや彫刻も人物よりは花鳥が多く、音樂も人聲よりは自然の音色に近いことなどを考へて見れば、我が國の文學が自然美を歌ふを長所とすることがわかる。誠に、上古から近世までの歌題の大半は花鳥風月である。軍記、謠曲、淨瑠璃なども叙景シヨウケイの文を點綴テウテウして精采を生ずる。俳句に至つては、季の無いものは句にならぬことになつてゐるのである。凡そ、四季の風光は一日も我が國民の頭から離れたことが無い。この四季の景色と人事とを結びつけて感ずることは、即ちあはれを知ることである。源

源平争亂時代の  
武將  
源平争亂時代の  
武將

足利時代の武  
將

義家や源三位頼政や平忠度等の日本武士として優にやさしく感ぜられるのは、このあはれを知るといふことがあつたからである。頼朝も尊氏も秀吉も太田道灌も、暇あるときには、風流の技を翫モクんだ。日本の武士道は自然の美を愛し物のあはれを解することトキを一つの要素とする。

英雄豪傑ばかりではない、日本人ほど、國民全體に、あはれを知つてゐる。即ち、詩人的な國民は、恐らく、世界中にまたとあるまい。歌心は誰でもある。歌は作らぬまでも、俳句を作る。上手でなくとも、何人も作

つて花見遊山の時にも一興とする。この花見といひ、雪見といひ、月見といひ、春は花、秋は紅葉、詩人的國民はまことに遊事に忙いそしいのである。(國民性十論)

\*名は武夫。文學者。文學士。

二八 蟲の音

沼波瓊音

私は一年の中で秋が一番好きである。「なぜ生きてゐるか、どういふ目的で生きてゐるか」と問はれると、「秋を味ふのが、生存の一つの目的である」と答へたい位私は秋を好む。そして私が秋に對して感じる心持はどうかと云ふに、荒立つた後に來る澄んだ心で

ある。例へば悲しいとか腹立たしいとか、感情が烈しく動いた後に、非常に靜かな落着いた氣持になる。其の荒立つた感情ののちに來る心持、それが秋の心持である。兵士が劇しい戦争に飽あいて、發心した心持にでも喻たとへようか。兎に角、細かく優しく、そして澄んだ感じである。さういふ心持が秋の風物にはどんな物にでも現れてゐる。見る物でいふと、日光、雲、草花など。香で云へば木の花。觸覺では冷たい風、聽覺では蟲の音。中でも蟲の音に秋の感じが最も深い。

耳に觸れるものでは、春はいろく／＼な小鳥が鳴く。又夏の晝には蟬が鳴くけれども、蟬の聲は却てうるさいものである。秋の蟲の音を聞く心持は、春の朧夜に鳴く蛙の聲を聞く心持にも比べられるが、蛙の聲は單調で、蟲の聲ほど複雑な、豊富な、そして細かな感じを起させない。其の點に於て蟲の音は最優等で、さきに述べた秋の感じなり味ひを現してゐる。小鳥の聲だとか、蟬の聲だとかは、外的とでもいふのか、外に現れるやうな趣を持つてゐるが、蟲の音は內的である。蟲の音を聞くと、心の眼が内に向つて開

くといふ趣がある。

蟲の音は俳句では秋の季題になつてゐるが、實際は土用の中から鳴初める。それも好い。秋に入つて月夜に鳴くのも好い。闇夜に鳴くのも好く、又聞きながら眠に入るのも好く、夜中にふと目覺めて聞くのにも趣がある。朝早く聞く、晴れた日の晝間聞く、雨の降る日に聞く、それ／＼異つた情趣があつて、何れも好い。殊に夜汽車にでも乗つて行くと、或淋しい驛へ着いて、ふと蟲の音を聞くことがあるが、旅のあはれも一入覺えられて、深い味ひがする。又夜の

銀座の明るい賑やかな通りを歩いてゐて、細い暗い露地に入ると、足許で蟲の音がしてゐる。更に趣が深い。

それから秋の夜ななく、蟲の音を聞き馴れてゐたのに、冬の初になつて、全く何の音もしないのに氣がつくと、たまらなく寂しさを覺える。(しら榎)

三九 松平信綱の幼時

新井白石

或時、若君、大殿の御寢殿の屋の軒端に、雀の巢をくひ子を生みたりしを、こなたより御覽じて、欲しがらせ

名は君美、徳川幕府の儒者、六代將軍家宣に仕。徳川二代將軍秀忠。

たまひ、長四郎とりて參らせよとあり。長四郎年十一歳のときなれば、いかにも叶ふまじきよし辭しければ、晝は驚きて飛去ることもありなん。巢くへる處をよく見置きて、日暮れてこなたの屋の軒の端さして登り、彼處に忍び行きて取るべし。大人は身重く足音もしなん。只汝取りて參らせよと侍ふ人々の教へしかば、力なく日暮れて、こなたの屋よりして傳ひく行く。既に御寢殿の軒に至りて取らんとせしに、踏損じて御坪の内へどろと落つ。

將軍家御刀取つて障子引明けたまへば、御臺所燈火

とつて出でさせたまひ、御覽するに長四郎にてありけり。將軍家不思議に思召して、汝は何しにこゝには來りぬるぞ。と御尋ねありしに、今日の晝この御殿の屋の軒端に雀の子を生みたるを遙かに見て、餘り欲しさに參りて候。と申す。將軍家「いや、おのれが心にはあらじ。誰が教へけるぞ」と色々に御推問あれども、幾度にても初め申し、言葉に變らず。おのれ事の由ありの儘に申さず、争ふこそ年にも似ぬ不敵なれ。と仰せられて、大きなる袋の中におし入れて、口を御手づから封じ給ひ、柱にかけさせ給ひ、事

の由ありのまゝに申さばらん程は、いつ迄もかくて候へ。と仰せけれども、尙争ひ申す事初めの如し。夜已に明けて、常の御座に出でさせ給ふ。御臺所は夙く心得させ給ひて、彼が幼き心にて、身の悲しさを顧みず、竹千代君の仰せなり。と申さばることを深く感じたまひて、女房達に仰せて、朝がれひ召して、是たうべよ。とて賜ひて、又御手づから元の如くに縫はせ給ひて、置かせ給ふ。晝の程將軍家入らせたまひ、又推問ありしかど、終に言葉を變へず。御臺所御詫言ありしかば、さらば向後の事を慎むべきよし仰せて、



御宥ユルしあり。

將軍家、御臺所に向はせ給ひ、彼が今の心にておひた  
ちたらんには、竹千代殿の爲には雙フタヘなき忠臣にて侍  
らんものぞと、殊トの外悦ウツクはせ給ひきとなり。(藩翰譜)

\*名は操。著述家。  
明治四十年歿す

三〇 美濃の隱家

岸キ上ノ質ノ軒ノ

かねて期しつる事ながら、昨日まで纏カタひし綾羅錦繡リョウロウキンブ  
を荒栲アラカク衣と着かへしのみかは、水汲み薪樵シノる業助く  
るは、唯一人の老僕なれば、山風寒き埴生ウツクの小屋に、良  
人に事へ、兒をはぐくみ、炊カクぎ洗濯ソウダクに日を暮し、夜は孤

燈の下に、麻紡アサトみ絲繰イトりつゝいとまめく、しく勞き  
けり。されど生ひ先望ある幼兒達の、賤が子等と遊  
び連れて、餘念ヨルなげなる様を見ては、流石リウセキに優しき親  
心の、あはれ由緒ユジある武士の兒と生れながら、一生を  
花さかぬ埋木ウレキとなしはてん事コトのかなしさよと歎か  
れて、折々は手織布子の窄セマき袂タビを濕しけん。

幼き兄弟は以前の榮華を忘れ果て、獵師木樵ヤクサの子  
等に馴れむつみては、己れも亦先祖代々の山賤ヤマシヤの如  
く覺えて、母が苦心を知る由もなく、日々野山に遊び  
くらしつゝ、見やう見まねに兎逐ウサギひ柴チこる業さへ覺

えて、互に友とし行きかひけり。處の子等は、山刀・鎌・鎌の外見しこともなき眼に、あてやかなる具足・調度など見出でて、歸りて親々に斯くと物語れば、物識めきたる老人どもは、さてこそ彼處の浪人殿は確かに京の歴々が、流されて來られたに相違あるまい。兄弟の兒も母ぢやの仕附が良いやらして、悪さはしなから行儀がよいぞ。と鼻うごめかせば、深い山には猪鹿の種は盡きぬに、瘦せても枯れても、京の歴々の果ぢやとあれば、金の茶釜の一つ二つはあらうも知れぬ。と、何心なき里人の風説を、いかにしてか野伏・山立

どもの聞きしりたりけん、さらば彼の家には金銀もあるべく、財寶も多かるべし。好き隙あらば忍び入りて我等が榮耀の元手にせん。と、竊かに談らひたりとは固より誰も知るよしなかりき。

主人稻葉正成はかりそめの風の心地して打臥したるが、思の外に病勢つゝのりていといたう衰へたり。さらでだにかひくしくまめやかなる福女は良人の病に罹りけるより、日夜帯をも解かぬ看病に、すこしも怠なかりけるが、其の誠心の通じたりけん、今宵は熱も稍低うなりしと覺えて、心ちもさまで苦しか

らず。御身は晝夜手一つの看病に、さこそは勞れ給ひぬらめ。暫しが程だにまどろみて、身をいたはり給へ。と、情ある良人の言葉、むげに否まば、なか／＼に病の爲に悪しかりなと思ひければ、さらば暫しが程御免あれ。とて、久々にて己が臥床に入りぬ。

されど病む良人が事、幼兒の上、生憎に心にかゝりて、夜は更けぬれど眼も合はず。折しも冴ゆる山風につれて、遠寺の鐘のきこゆるを數ふともなく數ふれば、草木も眠る丑三つなりけり。傍を視れば頑是なき幼兒の、寢顔に笑を含めるは、如何なる夢路か辿る

らん。さてもかゝる片田舎に人となりなば、いつの日か成り出づる期あらんなど、又も來し方行末の事など思ひ出でて、眼はいよく、さえまさり、思はずも太き息のつかるゝを、病める良人に悟られじと、強ひて夜着引被きて、睡れる様を装ひけり。

折しも、枕邊の兩戸がらりと開きて、ばら／＼と足音立て、はや眼の前に立ち現はれたる四人の黒き影は、問はでもしるき曲者なり。餘りの意外に驚きて、跳ね起きたる福女、何者ぞ。と聲かくれば、問はるゝ迄もなし、夜の稼カネをする者なり。今宵夜更けて音づれた

るも、此の家に蓄へたる金銀財寶の有らん限を申請  
 けんためぞ。命惜しくば、資財残らず出して我等に  
 捧げよ。否まば病みほうけたる此の家の主人を血  
 祭せん」と、簀子荒らかに踏鳴らして、息まきかゝるに、  
 福女は露ばかりも慌て騒げる氣色なく、さる儀なら  
 ば無用なり。主人の病めるを窺ひて、女と侮り入込  
 みたる野伏のしれものども、そも我を誰とか思へる。  
 明智殿の御内に鬼と呼ばれし齋藤内藏助利三が息  
 女、今は稻葉佐渡守正成が室と知らざるこそ愚なれ。  
 汝等如き盜賊に、塵一つだに取らすべきかは。無禮

In. Sumako  
Sumamoto

の振舞其處動くな。といひも終らず、床に懸けたる紀  
 正恆が鍛へに鍛へし業もの、大太刀おつ取り、矢庭  
 に二人を斬つて捨て、猶も漏らさじと斬立つるに、残  
 れる二人は慌て惑うて、逸足出して逃去るを、福女は  
 追うて庭口まで出たりしかど、如法闇夜に紛れてい  
 づちいにけん、跡追ひかけん術なきのみかは、病める  
 夫の上、幼兒の上、痛くも心に懸れば、取つて返しぬ。  
 この事誰いふとなくらはさに上りて、さては心ざま  
 の雄々しく賢しきのみにはあらで、武藝また世の人  
 に勝れておはしけり。かへすぐもいみじき女性

In. Sumako  
Sumamoto



